

オープン カレッジ

杜氏は日本酒造りの技術面での最高責任者である。かつて、日本酒を醸す方法は、地域ごとの杜氏によってのみ伝承されてきた。それは外部に漏らされることのない、杜氏のみが知る技術であった。

杜氏の仕事は、伝統的には、農村の冬季の出稼ぎとしての季節雇用であった。杜氏は、冬に蔵元に住み込んで酒造りを行い、それが終われば地元へ帰ってしま

杜氏と日本酒

のような背景に由来する。

もちろん、現在では、日本酒の発酵プロセスは科学的に解明されている。また、国や都道府県も酒造りの技術を向上させるために積極的に技術を研究し教育を行っている。結果として、かつてのように杜氏を雇わずとも、酒造りが可能になっている。例えば、いまや全国レベルで有名な山口県の「獺祭」は、杜氏を置かず、科学的な管理方法で醸すように工程を変えたことで有名である。あるいは、杜氏の制度を廃止して、代わり、製造責任者や工場長とした蔵や、蔵元自らが酒造

独立行政法人酒類総合研究所による全国新酒鑑評会での金賞獲得である。ただし、鑑評会が日本酒評価のすべてではないことに注意を要する。実際には、石川県の「菊姫」のように、あえて鑑評会への参加をやめたが、依然として銘酒として知られている酒も少なくない。

分析の結果、次のことが明らかになった。第一に、過去の累計受賞回数が多い蔵に所属している杜氏の方が金賞を獲得しやすい、第二に、年齢が若い杜氏の方が金賞を獲得しやすい、第三に、特定の杜氏流派に属している杜氏の方が金賞を獲得しやすい、ということである。一方で、杜氏の経験年数や、伝統的な季節雇用であるかどうか、蔵元で役職を与えられているかどうか、といった点は金賞の獲得とは無関係であった。

秘伝の技術が ストーリーをつくる

う。蔵元は、資金や場所などを提供したが、酒造りは杜氏に一任していたため、日本酒を醸す技術は杜氏たちが保有し伝承してきた。杜氏とその集団が謎に包まれているという印象は、こ



梶山女学園大学
現代マネジメント学部准教授
中本 龍市

なかもと・りゅういち 組織論
戦略的提携、社会ネットワーク、ビジネスリサーチ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程指導認定退学。1988年生まれ。

だが、科学的な酒造りが可能になった今でも、杜氏に対する期待は大きなものがある。杜氏の秘伝技術があると考えられており、それが日本酒の価値を高めている。「あの伝説の杜氏が醸した酒だ」と聞けば、圧倒的においしいと感じるようになる。

では、実際には、杜氏は日本酒の質にどのような影響を持つのだろうか。筆者らの研究グループは、杜氏の属性と日本酒の評価を定量的に分析した。ここで評価指標として用いたのは、

これらの結果は、杜氏が守ってきた技術に対するイメージを一部修正するものである。だが、イメージを壊すものではない。むしろ、特定の杜氏流派が、金賞を獲得しやすいという結果は、杜氏が伝承してきた秘伝の技術に対するロマンを感じさせるものである。

杜氏を語ることは、酒にストーリーを与えることである。国内のみならず海外の顧客へも訴求するストーリーを与えることで、日本酒業界が活性化することを期待したい。